

歴史探訪

クラブ 其の214

History Inquiry Club



文化財課 ☎22-1720
(博物館) FAX 22-2028

お札ふだが空から降りてきたお

ええじゃないかという言葉は教科書などで聞いたことがあると思います。このええじゃないかは江戸時代末の慶応3年(1867)ごろに全国的に流行した、神社などのお札が落ちていゝるのを空から降りたと信じていることで、これはいい事が起こる前触れに違いないと、「ええじゃないか」と囃子ながら集団で踊り、世直し願望をかけたこととです。ええじゃないか自体は近畿地方が発祥になりますが、発端となる

お札降りの事例は田原でもみられました。今回はこのことについてご紹介します。

このお札降りというのが初めてみられたのは、現在の豊橋市といわれています。慶応3年7月14日、牟呂村で伊勢神宮の下宮のお札が多治郎という村人の屋敷の竹垣の裏に落ちていゝるのを富吉とみきちが見つけました。富吉は空から降ったものではなく、誰かが落としたものではと疑問を持ちながら村役人にお札を預けました。そうすると、その日に富吉の8歳の息子が急死し、翌日には、お札が空から降ってきたという事に、疑念を持った人物の妻も、亡くなるということが起きました。この二人が亡くなるという事件



▲「ええじゃないか」の様子 落合芳幾筆「豊饒御陰参之図」(部分) 豊橋市美術館蔵

があり、村人たちは「お札が空から降ってきた」ことを疑って神罰が下ったのだと噂をしました。それから、この村に神罰が下らぬようにお札を納め、お祓いを行ったり、供物を捧げたりしました。その後も複数お札が発見され、7月19日の夜には、牟呂村で他の神社のお札と共に伊勢神宮や伊良湖神社のお札も降りました。この後も何度もお札が発見されたため、そのたびに神事や祭礼を行うということになり、これが全国に広がっていきました。

このお札降りの事例は、田原でもありました。畠村萬附留日記という現在の福江町の記録には、牟呂村の1カ月後に当たる慶応3年8月20日に火除けとして信仰がある秋葉山のお札が三軒の家に降りているのが発見されたとあります。それぞれのお札が持ち寄り、21日に神事が行わ

れることになりました。ここでは、お酒やお餅が献上され、それが人々にふるまわれたり、投餅が行われたりするなど、終日賑わった事が記載されています。

畠村では、この日の他にも何度もお札が降りています。お札の種類としては今回取り上げた秋葉神社以外にも、伊勢神宮・津島神社・豊川稲荷など、さまざまな神社仏閣のお札があった事が記載されています。



▲お札が降ってきた当時の伊良湖神社を描いた渡辺華山の日記

畠村に最後にお札が降りたのは慶応4年(1868)6月25日で、10カ月の間で52カ所にお札が降りました。このようにあの有名なええじゃないかの発端となるお札降りが田原にもあり、神事が行われ賑わったという事に、この時代の流行の一面を見たように歴史の奥深さを感じますね。

※今回の原稿執筆にあたり、葉山茂生氏の研究を参考にしました

(学芸員 鈴木まりな)